

たのは、実に終戦二年後の昭和二十二年八月八日であった。

徴用と軍隊

富山県 紺谷 正三

大正十二（一九二三）年富山県新湊町で紺谷与三の六男として生れる。昭和十六（一九四一）年三月、伏木商業学校卒業、石炭販売会社に就職する。

―徴用工員時代―

昭和十六年九月、当時白紙動員と呼ばれた徴用を受け名古屋陸軍造兵廠千種工場に配属された。宿舎は全寮制で寮長は陸軍曹長だった。朝六時、起床ラッパで飛び起き、点呼、体操を終わって部屋へ駆け足で帰り布団を収め掃除していると、直ぐ食事ラッパが鳴る。箸箱を持って食堂へ行く。食後、隊列を組んで工場へ出勤する。歯を磨き顔を洗っている暇がない。私は幸い事務所勤務だったので出勤後事務所の台所で歯を磨き洗面することが出来た。

屋陸軍造兵廠を退社する。

―軍隊生活―

昭和十八年十二月十日、富山第三十五連隊の留守部隊である歩兵第六十九連隊に現役兵として入隊。翌日仏印派遣軍第四二三五部隊（第二十一師団第八十二連隊）に転属し、第九中隊に配属となる。昭和十九年一月十五日、仏領印度支那派遣のため富山を出発、一月十八日門司出港、南下する。

―輸送船沈没―

いよいよ戦地へ出発である。海軍の護衛もなく輸送船だけで南下する。富山出発の時は背囊に雪が積もる寒い日だったが、出港して南下すると一日と熱くなる。貨物船には何枚もの棚が造られ一帖に二人が起居するほど狭い場所であった。

昭和十九年一月二十一日、船首には第八中隊、船橋には第九中隊、船尾には第十中隊から、それぞれ初年兵二人ずつが出て対潜監視に立哨していた。

十二隻の輸送船団は上海沖の南支那海を航行し

工場の勤務は午前七時から午後五時までである。一日中働き続きで、寮に帰れば寮のいろいろの勤務に就く。食事当番、掃除当番、不番番（朝まで交替）などで、若いからこそ出来たと思うが、軍隊の内務班生活と同じような生活をしていた。このため二年後に軍隊へ入隊しても内務には少しも辛くはなかった。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争開戦、造兵廠内の意気一段と高揚し、兵器の増産に四千人の工員が邁進する。防空演習が始まった。私ともう一人は工場長の伝令として腰にサイレンを下げ、広い工場を鳴らしながら走り回った。

昭和十七年十月、名古屋陸軍造兵廠（熱田、千種、鳥居松各工場）内の千人以上の徴用工員の中から、私一人が優秀徴用工員として選抜された。日本全国と満州の造兵廠から選ばれた十人は東京にて、陸軍行政本部長陸軍大将木村兵太郎閣下より表彰を受けたことは一生の誉れでした。

昭和十八年十一月三十日、現役入隊のため名古屋

ていた。私は第九中隊の監視兵として船橋の上の監視所に、鉄帽、救命胴衣を着用、双眼鏡で海面上の対潜監視を続けていた。

午後五時頃かすかに爆音が聞こえたが飛行機が見えない。大声で「爆音！」と叫ぶ。そのうち雲間から双発の爆撃機B17が一機、二機と急降下してくる。「右舷三〇度敵機！」と大声で報告する。護衛艦がないので低空で飛行して来る。敵機の中央の機関砲座より撃つて来る米兵の姿が見える程で恐怖を覚えた。

カラカラと二〇ミリ機関砲の弾が飛び散る。班長が「早く降りて来い！」と怒鳴るが恐怖のため体が動かない。目の前の鉄板にプスプスと音がして穴があいた。二機、三機と銃撃してきて、しばらくして折り返し帰って来た、小さい機影がだんだんと大きくなり、爆音も大きくなった。ヒョイと空を見ると空いっぱい飛行機が見えた。突然、爆弾が五、六発落ちてきた。ドカンドカンと大爆発して大きな汽船が大揺れした。爆弾が二、三メ

一月二十三日、台湾の高雄に上陸、輸送船の都合で約一カ月仮兵舎で過ごす。二月二十五日高雄港を出港、途中海南島の海口港に三日程停泊。

いよいよ仏印の海岸沿いにジグザグ航行して南下することになった。数日して船は大きな河の入口で二、三日停泊する。メコン河だと聞かされるが対岸がハッキリ見えない。海かと思つた。総延長四千二百キロの大河だと聞かされ驚く。五、〇〇トンの船が悠々と上流へ遡るのでその河の大きさに驚く、日本では想像出来ないことだ。

三月十日、仏印の商都サイゴンに上陸する。「ただ今より連隊本部に向かって行軍する。帝国軍人らしく堂々と行進せよ。キョロキョロとよそ見をするな」と活を入れられるが、珍しくて横目で街の景色を見ながら行軍する。

サイゴンには四日程いた。第三大隊の駐屯地であるカンボジアのプノンペンへ向け船で出発する。私達初年兵八十人（第九中隊、第十中隊）と若干の兵隊を乗せた一〇〇トン程の船でメコン河を航

トルズれていたら私は吹き飛ばされて戦死していただろうと思う。

爆弾は通風窓から直接機関室に入って爆発し、十メートル程の火柱を吹き上げた。船は停止した。機関室にいた船員五、六人が戦死した。また後部甲板の第十中隊の監視兵の一人が銃撃を直接受け戦死した。私は幸運を神に感謝した。船は直ぐ沈没しなかったがだんだん浸水して来たので大海の中へ飛び出し、他の汽船のボート数十隻に、富山の初年兵五百人余りは半日かかって助けられた。

後で聞いたのだが米軍の爆撃機は重慶から飛来したもので、在支米空軍のB17だということだった。私達勤務兵は最後まで残るように命令される。翌朝、船尾は波に洗われ、汽船は半分船尾から沈みかけていた。馬港から軍艦（掃海艇）が来て汽船に横付けになった。

輸送指揮官、船長が書類を全部燃やして、全員軍艦に移る。五百メートル程離れた頃輸送船が船首をぐつと立ち上げながら沈没して行った。

行する。広々とした湖のような所もあり、川幅五百メートルもある。山や丘もなく所々に小さな村があり、あとは荒野があるだけで、その大地の広さに驚く。

三月十七日、プノンペンの波止場に到着した。波止場はドラム缶数本繋ぎ合わせて板を敷いた浮き波止場だった。理由は一日一回メコン河が満潮の時、上流にある琵琶湖の三倍もあるトンレサップ湖に、海水が逆流するため水位が上昇するためだという。海から数百キロ離れた所まで海水が上がって来るとは日本では想像出来ない。

プノンペン駅前のフランスの学校を兵舎にして第九中隊、第十中隊の二個中隊が駐屯していた。ここでいよいよ本格的な初年兵教育が始まる。

四月十一日、警備交替のため第八十二連隊は北部仏印へ移動することになった。第三大隊はハイフォン地区に駐屯、第三大隊の初年兵はハイフォン郊外のヌイデオと言う所で初年兵教育を受ける。六月三十日、兵科幹部候補生に合格、集合教育

のためハノイの連隊本部に集合する。約百二十人、夜点呼も終わり就寝の準備していると「貴様等の教官の大山少尉である。ただ今より非常召集する。早く前の広場へ完全装備で集合！」と大声で命令する。約半数集合した時、教官は「出発！」と号令して走り出した。

遅れて出て来た候補生は、営外へ出た時行先が分からず、見知らぬハノイの街を無意識に走るだけだったと後で聞いた。

行軍中、突然「空襲警報！」のサイレンが鳴った。通行人が多数走りだしたため隊列が乱れ先頭を見失ってしまった。帰る道もわからず四、五人ずつのグループで連隊本部を探して夜のハノイの街をうろつく。日本軍のトラックが迎えに来てくれて連隊本部まで帰ったのは夜中の一時過ぎだった。しかしまだ帰っていない者が三十人程いた。無理もない全員ハノイの大都市は初めて来て何も知らないのだ。午後九時から五時間の夜行軍だった。戦場へ行ったら知らない土地で戦闘するのだ

方の空が薄明るくなって互いの顔が見えるようになったところ、葦の木が繁る高原地帯に入る。通称「梅ヶ原」である。夜行軍で落後した候補生は後続のトラックに便乗したが即減点された。もう試験が始まっていた。

電気も水道もない荒野に点々と兵舎がある。私達の兵舎は茅葺きで、中央が土間で、両端は板張りの床だ。夜はローソクで明かりを取り、水は河の濁水を濾過して使用する生活だ。

七月十日、幹部候補生集合教育で二次試験が始まる。夜中に雷がドカンと落ちて集中豪雨になると「敵襲！武装して演習場へ集合」との命令が出る。飛び起きて装備して豪雨の中二キロ先の演習場へ真暗な道を黙々と走る。先頭から半分以下の順に着くと減点される。毎日が試験だ。

またある朝うす暗い時間に、教官は兵舎中に催涙ガスを撒き散らしながら「敵襲！」と号令する。教官はガスマスクを被_{かぶ}っているがこちらはたまつたものじゃない。クシヤミが出るや涙が出るやら

から地図一枚で行動しなければならぬ。今日はその訓練だったと言われ、なる程と納得した。

七月一日、昨夜の猛訓練のため本日は休養日。午前中は寝ていた。午後から身の回りの整理をしていた。午後六時、ハノイから五十キロ北の通称「梅ヶ原」へ夜行軍と知らされる。ハノイ郊外へ出た所で突然教官が「自己保身の本能が勝つか、忠君愛国の至誠が勝つか」と大声で叫ぶ。答えは一つ「忠君愛国の至誠が勝ちます」と候補生が一斉に叫ぶ。

昨夜の駆け足で両脚がパンパンに張って重くて足が上がらないが、落後したら中隊へ返すといわれては、死んでも歩くと覚悟をきめる。ハノイから中国国境のラオカイへ向けて、暗夜のベトナムの道を黙々と行軍する。

四キロ行軍し五分休憩がある。「休憩！」の号令を聞くなり道端へバタンキュウと倒れ、鼾をかいて熟睡する。「出発！」の声でバット目が覚め、また歩き出す。何十キロ行軍したか分からないが東

無茶苦茶だが、それでも装備を着け、ガスマスクを被_{かぶ}つて、また二キロ先の演習場へ走る。上位の順位で到着する。減点なし。

七月三十日、最後の演習が始まる。朝六時、非常召集があり武装して集合する。朝食も食べずに直ちに出発、行軍演習をしながら約二十キロ離れた部落に入る。昼食のため大休止する。米もない、味噌、醤油等の調味料もない。何を食べたら良いのやらと思っていたら教官より「戦場では十日も二十日も水だけで戦っている戦友のことを思い野生の植物で食事せよ、バナナや他の果物は食べてはならぬ」と命令された。芋のつる、蛙、タピオカ等をとってきたが食べる気がしない。本当に戦場の気分がない。分隊で相談の上、タピオカ（日本の山芋のようなもの）を食べることにした。

水で煮込んだだけで一回食べた。しばらくして口の中が熱くなり唇が腫れて来た。クレオソート丸薬を舐めるが何の味もしない。灰汁_{あか}抜きせず食べたのでやられたらしい。二、三日舌の感覚がな

かった。午後また演習しながら帰路二十キロを行軍する。本当に苦しかった。

兵舎に着いた時は暗くなっていた。腹は減るし、ローソクの火が二つにも三つにも見える。朦朧としており、昼食と夕食の二食分有るが食べる気がしない。各自の位置で疲れた身体を休めていたところ、一人の候補生が土間に大の字になって寝込んでしまった。私は思わず「教官に見つかったら大変だから起きろ」と注意して起そうとしたが、彼は「俺は苦しい合格しなくても良い、このままにして欲しい」と苦しそうな声であった。

その苦しそうな様子を見て、これは彼の本心かも知れないと思った。今日の演習で落伍した者は相当な減点らしい。自分も苦しいがここでくじけたら、二次試験に合格して予備士官学校へ行けなくなる。どうしても合格して見せると心に誓った。

八月五日、百二十人中、五十五人の兵科甲種幹部候補生の合格が発表される。私も合格した。

が今でも臉に浮ぶ。終戦後復員して島尾の彼の実家を訪ねたが、やはりビルマで戦死していた。誠に残念だった。

私は歩兵隊第二中隊（中隊長・明平大尉）第三区隊（区隊長・藤沢少尉）に配属された。中隊長より、「本校の教育目的は野戦小隊長の育成である。確固たる信念、知識はもとより、いかなる激務に堪え得る体力、気力の養成にある。指揮官の判断が悪い場合、部下全員が戦死することがある。部下の生命を預かっているのが指揮官である。その責任は重大である」と訓辞がある。

教育隊入隊当初は基本的な訓練が主体である。次の戦闘訓練は交替で小隊長としての指揮演習を行う。

ある夜間演習で林の中へ入った時、木を遮蔽物とするため木に寄った所、腕をチクリと刺され「痛い」と叫ぶ。見ると小さいサソリに刺されたらしい。すぐ衛生兵に消毒してもらい注射してもらった。大きいサソリだと人命に係わるらしい。この

— 南方軍幹部候補生教育隊 —

八月九日、南方軍幹部候補生教育隊（陸軍予備士官学校）へ分遣のためハノイを出発する。サイゴン、バンコク、シンガポールを経由して九月十四日、ジャワ島中部のスマランに到着。教育隊は兵科歩兵、機関銃、歩兵砲、通信、輜重隊がスマラン、ジャチガン、バンドンに分かれて教育を受けることになった。

候補生は仏印、泰国、フィリピン、インドネシア、ビルマ等の南方全域の部隊より派遣されているので、出身地は北海道から九州までいる。

入隊して三日程たった日、第一期生の卒業式があった。卒業式の直後、萬谷久雄見習士官に会った。彼は中学校の同級生だったが、年齢が一つ上だったので陸軍予備士官学校第十一期生として卒業したが、即日ビルマ転属を命ぜられたのだ。若し生きて祖国に帰れたら久雄はビルマで戦死したと家族に伝えてくれ」と言われた時、何んともいえない寂しさを感じた。去り行く彼の姿

ような体験も演習の一部だ。

二泊三日の遠征しての演習も終わり、夜行軍で帰隊することになった。猛烈な演習の後なので少し疲労していたが頑張る。夜中になると眠気がしてウトウトしながら歩く、膝がガクツトしてハット目が覚める。

「指揮官はいかなる困難があろうと、兵の先頭に立ち行軍せねばならない。死ぬまで歩く強い精神力を持って」と教官に叱咤される。汗も出尽くしてしまい頬の髭に塩がつく。汗も出なくなると日射病になり危険である。夜明け近くになって二、三人が倒れたので大休止になった。倒れた候補生を大至急看護しないと死ぬ危険があるからだ。お陰で私達は大休止が出来て大変助かった。

— 昭和二十年一月一日 元旦 —

候補生一同、ジャワ海が見える高台で日本の方に向かって宮城遙拝、君が代の斉唱をする。入校以来初めての酒が湯呑半分支給された。

総合演習が始まる。ジャワの南海岸より山越え

して北海岸へ行く作戦だ。候補生一同数百人、輜重隊のトラックで南海岸のジョクジャカルタの兵舎に移動する。私達中隊は攻撃軍となる。歩兵砲、重機関銃隊も参加しドンパチと砲声が聞こえ、いやが上にも士気が上がる。

第一日目夕方、小さな部落に到着する。直ちに自分が入る蛸壺を掘る。一時間程してやつと穴が掘れた。今日は露営だ。マラリヤ蚊防止のため丸型の蚊帳をすっぽり被り、両手は暑い布製の手袋をする。いくら夜とはいえ赤道直下のジャワは暑い。

二日目行軍、戦闘訓練を繰り返して数十キロを進む。また露営する。疲労と暑さのため蛸壺の中で寝ている間に、無意識のうちに丸蚊帳を取ったらしく蚊に刺され目をさます。三日目になって、いよいよ疲労が甚しくなってきた。演習最後の朝、暁の突撃攻撃のため夜中に行軍し、ジャングルから敵陣近くまで水浸しの田を匍匐前進で進み、夜明けまで待機、腹の中まで水浸しになり寒ささえ

イリピン、マレーシア、インドネシアと各任地ごとに別れ、学校長中村少将、歩兵隊長大久保中佐及び各中隊長、区隊長に見送られスマランを出発する。シンガポールからは輸送の都合で十人程の単位で出発する。

先発隊にはガソリンの入ったドラム缶数百本を受領して行ったため、泰国境近くのストラダニーと云う所で一カ月も逗留することになった者もいた。

私達十二人は荷物の宰領もなく客車で出発した。シンガポール、クアランプール、ハジャイから上陸用舟艇で海上からバンコクに直行、カンボジアのプノンペン経由でサイゴンに着いたのは六月二十日だった。

六月二十五日、サイゴン出発、途中ツーラン現在のダナンに到着、列車はゴム林の中の引込線へ移動、私達は宿舎に泊まる。翌朝、空襲警報のサイレンが鳴った。久し振りの「空襲警報」だったので少しのんびりとしていたら「グオン、グオン」

感じた。

東の空がうす明るくなって互いの顔がかすかに見えるようになったころ、疲れと睡眠不足で腹這いのまま眠ってしまった。何分たつたか「突撃！」の声に目をさまし夢中で走るが、身体も靴も泥だらけで重くなっているのなかなか速く走れない。三日間の大演習は終了する。

上陸作戦演習、ケンダル岬の上陸作戦演習で重い鉄舟を担がされ、肩の肉が食い入るような痛い思い出があった。ジャングル戦闘演習、ボジャのジャングルに入り密林戦闘演習で一週間、猿や猪の出るような所で寝起きたこと。卒業近くになった頃より夜襲攻撃の演習が多くなった。またガス室で催涙ガスの実演、対戦車攻撃演習等の特殊戦闘演習が多くなった。

昭和二十年五月十日、陸軍予備士官学校第十二期生として卒業、陸軍兵科見習士官に任官。

数日後、生きて再び会う事はない最後の別れを惜しみつつ、各見習士官は仏印、泰、ビルマ、フ

とB 29の爆音が聞こえて来たので慌てて防空壕に飛び込む。ズシン、ズシンと爆弾で地響きと振動で地面が揺れる。風圧で耳がジーンと鳴る。防空壕のコンクリート壁にも、亀裂が出来る程距離に爆弾が落ちたらしく、本当に危なかった。

七月五日ハノイ到着。連隊本部へ到着の報告に行き宮下連隊副官に申告する。私は第四中隊配属となるが、第四中隊の本隊は三月の仏印戦争(明号作戦)後フランス軍を追撃して中国国境方面で作戦中であるため梅ヶ原北方の陣地に着任することになる。そして中国国境から五十キロ程南にある陣地に到着した。虎が出て来るジャングルの中だ。

その隊の将校は、病院から退院した中隊長一人だけだった。早速、週番士官勤務につく。陣地構築が任務だ。毎朝六時、起床ラッパが鳴る前に虎の吠える声がジャングルに響きわたると、鳥や動物が一斉に騒がしく鳴く声に目がさめる。

ジャングルの生活も馴れて来たころ住民の様子

がおかしい。後で聞いたのだがニューデリーからの放送で日本に原爆が投下されたこと、沖繩が米軍に占領されたことなどを知ったのだった。

八月十二日、連隊本部から帰還命令があった。急遽ハノイへ帰還する。八月十四日、命令により連隊本部の書類の焼却作業をする。何か非常時になったような緊張感が周囲から感じられる。翌八月十五日、全員連隊本部の広場に集合、数百人の将兵が整列して待つこと三十分、ラジオから天皇陛下の終戦の勅令の放送が聞こえて来たが六千キロも離れているためか聞こえ難かった。日本は連合軍に無条件降伏をしたと聞かされた時、どうしても信じられず夢を見ているように茫然として何もする気がしなかった。

昭和二十年八月二十日、陸軍少尉に任官。八月三十日ころ宮下副官から呼び出しを受ける。明号作戦で負傷入院し退院して来た第一大隊の下士官兵約四十人を連れてドクー総督官邸前の学校の警備につく。学校にはフランス軍の兵器が有るため

に好意的だった。おかげで警備交替等も順調に終わる。

警備交替を終了し連隊本部へ帰る。仮設の小隊も解散する。国境より第四中隊の本隊が帰って来た。私は正式に第四中隊配属となる。第四中隊は三月の明号作戦で仏軍本部のスタデル兵舎の正面攻撃をして、竹内中隊長、第一小隊長が戦死したため、木村中隊長と林少尉の二人の将校しかいなかった。私は第三小隊長に任せられ、阿部軍曹以下七十人、四個分隊の隊長となる。

十月初旬、連隊命令により第三小隊は先遣隊として連隊全将兵の戦後の居留地であるホンゲイ北方のカンファアポートへ先行を命ぜられる。連隊三千五百人の一年分の米を貯蓄するため数十組の先遣隊が派遣されたようだ。我が小隊も五十キロ入り米袋二千袋を運搬する任務につく。連隊本部に申告に行くと宮下副官がホンゲイ地区で三日前先遣隊を指揮して行った同期のB少尉が戦死したと話された。中国軍とベトナムゲリラの戦闘に卷

中国軍に引き渡すまで警備せよとの命令だった。

九月上旬、宮下副官より日本軍の降伏調印式に中国軍の軍司令官が来る、その随員の将校達の一部を接待せよと命ぜられる。数日して中国軍の若い将校が五人来たので丁寧に迎える。戦勝国の将校達ゆえに接待にも気をつかう。二日程して中国軍の将校達が帰国したのでほっとした。九月下旬、現在警備している学校の武器を中国軍に引き渡すので、武器、弾薬を整理しておくよう指示があった。数日して中国軍一個中隊が警備交代に来ると通知があった。正門に小隊整列して迎える。中国軍はラツパを吹奏して入門して来た。「捧げ銃！」と最上級の歓迎をする。中隊長は笑顔で返礼した。夕方、中国軍の将校を夕食に招待する。通訳を通じて話をする。中隊長は少し日本語を話せるので、どこで日本語を覚えたのかと質問したところ明治大学へ留学生として日本にいた時覚えたといっていた。年配の大尉だった。

中隊長は信義を大切にする立派な人格者で非常

き込まれて戦死したと聞く。昭和二十年十月のことだ。戦地はまだ状況不安で危険が一杯だ。終戦後、死ぬのは何んとしても避けねばならぬと思っ

た。ハイフォンで海船に米を積み替えてホンゲイに向け出港する。B少尉の時のように紛争に巻き込まれないよう、マストに何本もの日の丸の旗を掲げる。ホンゲイから北上するにつれ、海上に奇岩が数多く林立している。今有名な観光地であるハロン湾だった。

二日後の夕方、カンファポートに到着、本部へは明日荷揚げすると連絡して船に帰る。夕食をすませ星空を眺めてノンビリしていた夜八時ころ、二百人程の中国軍を乗せた小型客船が近付いて来た。突然近くの丘の上からバリバリと機関銃で中国軍めがけ銃撃して来た。中国軍も猛烈に反撃に出た。中間にいた我が小隊は巻き添えを食う形になった。「米袋を両側に積み上げて身を伏せろ」と大声で命令し、皆腹這いになる。頭上を「ビュン、

ビュン」と弾丸が飛び交う音を聞きながら、終戦後に死んだら無駄死だと思った。時々米袋にプスプスと弾丸が命中する音が聞こえる。二十分ほどして戦闘が終わった。中国軍は上陸せず帰って行った。

翌日米二千袋を本部に納入し、第四中隊の指定地であるカンファミンという海辺の近くの小さい町の丘に着く。数個のブラック建物が分散して建っていた。数日後中隊全員が到着した。終戦後初めて安住の土地に着いたと思った。

昭和二十年十一月、我々の所有していた武器、弾薬、日本刀等を梱包して中国軍へ納入する。武装解除だ。警備用として一部武器を残す。戦後四年間は帰国出来ないと噂があったが、困いもなく、地域内は自由に行動出来る。中隊ごとに現地自活が始まる。中隊本部、農耕隊、漁労隊、建設隊に編成する。軍隊は非常に便利な所だ。大工、漁業、農業、畜産あらゆる職業の人の集団なので自治活動の編成は楽だ。

年兵教育を受けた場所だ。ハイフォンから十キロ程の農村で、小高い丘の麓に広い平地がある。ハイフォンの街は日本軍、中国軍、ベトナム軍で大混乱している。ある日、ハイフォンの食堂で、この主人が私に「日本へ帰らずベトナム軍に入らないか。貴方は日本軍の将校だから部隊長になれる。ベトナム軍へ入って独立戦争に協力して欲しい」と頼まれたが丁寧に断った。事実第四中隊からも軍曹一人が脱走してベトナム軍へ入った。日本軍より多数の兵がベトナム軍に入り、フランス軍と独立戦争をしたらしく、我々が帰還してから三年後、ついにフランス軍をデンエンビンフで降伏させベトナムが独立した。

四月下旬、いよいよ我々の乗船順番が来た。船はアメリカのリバイティ船であった。第一大隊、第二大隊が同一の船に乗船した。乗船してから階級章をはずし軍隊の組織である中隊を解散する。夕方、三国師団長閣下ほか参謀等が波止場で見送り下さった。約二年半南方各地を転戦したがベトナ

私は農耕隊長になったが農業のことは何も知らないので指揮運営は農業出身の古参軍曹に任せた。兵隊と一緒にキャベツや甘藷やその他の野菜を作った。幸い南方の熱帯地方で豊作つづきだったので給食以外でも時々甘藷を焼いて食べたり出来たのでひもじい思いはしたことがない。

月一回中国軍の将校が現地を視察に来るが、日本軍が規則正しく生活をしているのを見て安心して帰って行く。ベトナムゲリラに入るか心配して視察に来るらしいが、我々としては捕虜らしからぬ自由な生活に満足していて、ただ帰国を待たただけだった。

昭和二十一年三月、突然日本へ帰国命令下る。一週間以内にハイフォンまで歩いて行軍しなければならぬ。四月初旬、自分の荷物装備を持てるだけに整備して出発する。カンファミンからホンゲイまで船で行き、ホンゲイからは歩いて行軍だ。数日してヌイデオに到着宿舎に入る。

ヌイデオは昭和十九年四月、我々第三大隊の初

ムの地に再び訪ねることがないと思うと苦しかったこと、楽しかったことの思い出が目に浮ぶ。

一週間程船旅したところ「日本が見えるぞー！」と誰かが大声をあげた。皆一斉に甲板に駆け上がる。あなたに陸地が見え蒸気機関車が白煙を上げて走っているが見えて来た。和歌山県の勝浦らしい。

昭和十九年一月、死を覚悟して南方に出陣したが、帰れたかと思うと嬉しく涙が出た。

夕方、伊勢湾を北上して名古屋港に着く。昭和十六年から十八年まで生活した名古屋はどこにもない。米軍の爆撃を受け見渡す限り焼野原だった。内地の状況は何一つ知らされず、これほどの内地の惨状を見て初めて戦争に負けたと思った。十八歳から二十三歳までの青春時代に徴用と軍隊の約五年間、自分なりに国のため家族のためと思って一生懸命に努力したことには悔いは無いと自分なりに納得している。

だが戦地だけではなく、内地も東京、大阪、名古屋等各都市が爆撃され、広島、長崎に原爆が投

下され、八十万人の一般住民が死亡した由。悲惨な戦争は二度と繰り返してはならない。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年十二月十日、富山第三十五連隊の留守部隊である歩兵第六十九連隊に現役兵として入隊。翌日、仏印派遣軍第四二三五部隊(第二十一師団歩兵第八十二連隊)第九中隊に転属する。昭和十九年一月十五日、仏領印度支那派遣のため富山を出発、一月十八日門司出港、南下する。

一月二十三日、台湾の高雄に上陸、約一カ月仮兵舎で過ごし、二月二十五日高雄港を出港、三月十日、仏印のサイゴンに上陸する。

三月十七日、プノンペン着。四月十一日、警備交替のため第八十二連隊は北部仏印へ移動することになり、第三大隊の初年兵はハイフォン郊外のヌイデオと言う所で初年兵教育を受ける。六月三十日、兵科幹部候補生に合格、集合教育にハノイ

の連隊本部に集合する。

八月五日、兵科甲種幹部候補生合格。南方軍幹部候補生教育隊(陸軍予備士官学校)へ分遣となり九月十四日、ジャワ島中部のスマランに到着。

昭和二十年五月十日、陸軍予備士官学校第十二期生として卒業、陸軍兵科見習士官に任官。

七月五日ハノイ到着。第四中隊配属となる。終戦後、八月二十日、陸軍少尉に任官。

歩兵第八十二連隊は本来、弘前編成の部隊であったが、最終的には補充担当部隊所在地は富山となり、主として北支で治安維持に当たっていた。大東亜戦争に入り仏印に転進、昭和二十年の「明号作戦」の中心の部隊となる。

それより先、昭和十九年十二月、印度支那駐屯軍及びタイ国駐屯軍はそれぞれ第三十八軍、第三十九軍に改編され、第三十八軍は第二十一師団、第二十二師団、第三十七師団を北部仏印に配置して仏印防衛と仏印武力処理の準備を行っていた。歩兵第八十二連隊は第二十一師団に属していた

が、仏印の敵性が露骨になるに伴って、大本営はついに武力処理を決意し、ドクー総督に対して、

仏印軍及び武装警官隊を挙げて日本軍の統一指揮下に入れると共に鉄道、海運、通信等作戦上必要なる機関を日本軍の管理下におくべきことを要求、その回答が不備であることから、三月十日、第三十八軍は全部隊に対して武力の発動を令し、日本軍の軍事行動「マ号作戦」が開始された。

この武力処理は、南部仏印については順調に進展したものの、中部、北部仏印においては仏印軍の頑強な抵抗に合い渋滞した。この間、安南、カンボジアが独立声明を發した。そして当時、九万五千を数えた仏印軍の主力は武装解除させられ、重要施設や諸機関は日本軍の手に接收、運用されるようになったという。

この間、執筆者は現地での初年兵教育を受け、幹部候補生としての教育をハノイ、ジャワ島のスマトラなどに派遣されつつ完了して、陸軍兵科見習士官に任官。七月五日、ハノイに戻って第四中

隊配属となる。そして終戦後、八月二十日、陸軍少尉に任官する。